東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

春秋時代における華夷秩序の研究

著者	渡邉 英幸
号	2
学位授与番号	23
URL	http://hdl.handle.net/10097/36865

渡邉英幸（わたなべ ひでゆき）

学位の種類	博　士（国際文化）
学位記番号	国博　第　23　号
学位授与年月日	平成15年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期３年の課程） 国際地域文化論専攻
学位論文題目	春秋時代における華夷秩序の研究
論文審査委員	（主査） 教　授　山　田　勝　芳　　教　授　瀬　川　昌　久 教　授　浅　野　裕　一 助教授　岡　　洋　樹

論文内容の要旨

序論　春秋時代の華夷問題
第一章　春秋時代の「戎」について
第二章　鮮虞中山国の成立
第三章　春秋時代の中華秩序とその特質
第四章　春秋時代の国際会盟と華夷秩序
第五章　晉文公の諸国遍歴説話とその背景
第六章　『春秋公羊傳』の華夷観念とその構造
結論

序論　春秋時代の華夷問題

本研究は、春秋時代の華夷秩序の構造と展開を解明することを目的とする。ここでの華夷秩序とは、春秋時代の諸国人が形成した〈中華〉という枠組みと、その内・外を含めた諸関係を総体として呼ぶ言葉である。本研究では、文献史料に見える〈中華〉と〈夷狄〉という二元的な概念を、重

層的な差異意識と動態的な社会関係に即して分析し、その歴史的な展開過程を解明する。かかる考察により、春秋諸国・諸集団間における秩序構造を復元するとともに、戦国時代以降に連なる〈中華〉の原初的な形態の追究を行うものである。すなわち中国史のみならず、東アジア史を通じてきわめて重要な意義を持つ華夷観念について、その形成期の諸相を具体的に究明し、従来の諸説とは異なる新たな形成論を提示しようとするものである。

春秋時代の華夷問題に関して、従来の研究では、中華と夷狄の境界が〈文化〉の有無にあるとする説と、中華と夷狄を対置する観念が後の時代に形成されたとする説という二つの見解が存在している。しかし、春秋時代の華夷秩序の具体的な実態は、従来必ずしも明らかになっていない。このような情況を克服するためには、中華と夷狄という二項対立的な概念をいったん分解して、春秋時代の社会に存在していた重層的な差異意識や、それを越える交流関係を具体的に分析し、中華の境界が成立してゆく過程を復元する必要がある。

すなわち本論の考察は、実体としてまとまった中華の存在を前提として、夷狄との区切りを論ずるものではない。春秋時代の多様な差異意識と、諸国・諸集団の間で結ばれたさまざまな関係を、いくつかの現象に即して具体的に検討する。その上で、内・外を分かつ境界を持った中華と夷狄という枠組みの形成経過と、それに対する文献の認識・評価の諸相を解明してゆく。

第一章　春秋時代の「戎」について

春秋時代に活動していた「戎」「狄」と呼ばれる諸集団については、従来大きくわけると二つの理解が存在している。第一は、後の匈奴などに連なる、中国外の牧畜民族と見なす立場であり、長城地帯で発見されている考古学的資料と結びつける説も登場している。第二は、春秋時代の「戎」や「狄」は北方民族ではなく、中国の内部において設定された、何らかの差異であったとする説である。しかし、春秋時代の戎狄の実態と観念には、なお不明な点が多く残されている。

そこで本章では春秋時代における「戎」という呼称と、その名で呼ばれた集団の実態について、主に三つの点から考察を行った。第一は、「戎」がいかなる地域で活動していたのかという課題である。とくに問題となるのは、「山戎」という集団である。春秋時代の山戎は、通説では現在の北京の北方で活動していたとされている。しかし、文献を詳細に分析すると、山戎は春秋時代の初期において、実際には専ら山東や河南地域の諸国と交渉を有していたことが判明する。この山戎が現在の北京より北方に居住していたとは考え難く、太行山脈の東南麓を根拠地としていた可能性が高いのである。それに対し、山戎を長城地帯以北の存在とする記述は、むしろ戦国時代以降の戎狄の分布状況に合致すると考えられる。

つまり春秋時代の「戎」は、中原諸国の近隣において活動していた集団であったと考えられる。春秋時代は、城邑（城郭を巡らせた都市的集落）を基本的な構成単位とする、数多くの「國」が分

立していた時代である。当時の華北地域には、中国地域と北方地域とを分かつ、明確な境界は存在していなかった。このような時代に活動していた戎狄は、長城地帯に即座に結びつけることはできないし、「中国内地」の存在として限定することも妥当ではない。むしろ問題となるのは、諸国と戎狄が雑居していた情況から、中原地域と長城地帯という、相互に対立し交流しあう二つの地域的枠組みが、次第に成立してゆく過程なのであるということを明らかにした。

第二の課題は、諸国が「戎」をどのように認識し、またいかなる関係を結んでいたのかという点である。春秋時代の諸国は、戎狄と密接な交渉関係を有し、しばしば盟誓や婚姻をとり結んでいた。この事実は、従来、戎狄に対する差別意識を伝える文献史料の記述と矛盾すると考えられ、春秋時代の諸国と戎狄の間には、差別が存在していなかったとする説が有力であった。しかし、当時の諸国と戎狄との関係を具体的に検討すると、そこには「対等」な関係は存在せず、むしろ晉などの有力国が、周辺の戎狄を掌握して自己の勢力を拡大して行く経過が進展していた。

従って諸国と戎狄との間の密接な交渉関係は、戎狄に対する差別観の存在を否定する根拠とはなりえない。城邑外の領域化を志向していた諸国は、「野」に広範に分布する戎狄を「禽獸」視しつつも、積極的に支配下に組み入れていた。『左傳』などの文献には、戎狄に対する差別観念と、諸国と戎狄との交渉関係に関する記述が同居している。本章では、このような文献の記述が、諸国が戎狄と地域を共有していた、春秋時代の社会的な情況を伝えていることを明らかにした。

第三の課題は、春秋時代に「戎」と呼ばれた諸集団が、いかなる存立形態を有していたのかという問題である。漢代以降の史料には、「戎」の城邑の痕跡を示す記事が散見している。しかし、この記事を根拠にして、春秋時代の戎狄が城邑に居住していたと即断することはできない。成周洛邑の城下に存在した「九州」という諸邑は、晉が服属させた戎狄の君長たちを集住させるために建設した、特殊な城邑であった。この「九州之戎」に代表されるように、「戎」の城邑として伝えられる集落は、いずれも諸国によって建設された、戎狄を支配するための居住空間であった。春秋時代の「戎」とは、城邑に居住する諸国とは存立形態を異にした山林藪澤地の集団であったと結論づけることができるのである。

第二章　鮮虞中山国の成立

鮮虞中山国は、春秋時代の後期に太行山脈東麓に出現した、城邑を持つ「國」であった。戦国時代の中山国の遺跡が発掘調査され、精巧な青銅器に代表される出土資料と、都市の遺構が確認されている。この中山国は、同時に「狄」であるとも解釈されており、春秋・戦国時代の戎狄を考察する上で看過しえない重要な国である。従来の説では、中山は北方民族である「白狄」鮮虞が中原地域に侵入して、次第に同化されていった国であると理解されている。しかし前章で検討したように、春秋時代の戎狄は、北方地域＝牧畜民、中原地域＝農耕民という二元論的な視点では、理解するこ

とができない。中山国の具体的な性格が、問題となるのである。

諸文献の記述を概観すると、春秋から戦国時代にかけての中山国の歴史は、次のように整理できる。まず戎狄の活動していた東陽の地に、春秋後期になって鮮虞中山という城邑をそなえた国が登場した。この鮮虞中山国は『左傳』で他の諸侯と同レベルで扱われ、『穀梁傳』では「中國」とも称された。さらに前四一四年の「武公初立」により、周王の権威を承認する君主権が確立し、周の封建諸侯である戦国中山国として周王や諸国に認知されるに至る。これは、鮮虞中山が当該時期の国際的な関係の中での地位を次第に上昇させ、周王の承認を獲得するまでになったことを意味する。しかし中山と対立関係にある隣国の趙では、依然として「狄(翟)」に起源をもつ国と見なす意識が強かったと考えられる。戦国中山国は、のちに他の諸国と共に王号を称するが、なお周王の「諸侯」としての意識を有していた。やがて中山国は前二九六年、趙に滅ぼされる。

では、戎狄が活動していた地域に、他の諸国と同様の存立形態を持った鮮虞中山が成立するに至った背景には、何が存在していたのか。やはり問題となるのは、晉による「狄土」への進出という歴史的経過である。春秋中期ごろ、晉は太行山脈東南麓に大きな勢力を有していた赤狄潞氏を滅ぼし、戎狄の居住していた山林地域に対する進出を本格化する。それは後に晉の縣邑の出現という結果につながったが、当初においては、「略」という特異な行動によって領域化が進められていた。「略」とは、軍隊を率い一定地域に対する巡行を行い、在地の諸集団の掌握を通じて、当該地域の領域化を企図した行為であった。これは春秋時代の他の各国においても確認される。

この「略」が、東陽地域は晉の領域として確立されてゆく契機となった。晉の領域化を受け、該地に居住していた「衆狄」たちは、晉に服属してゆく者と、自前の「國」を建設して晉に対抗する者、そしてあるいはより北方へと遷徙してゆくものとに分かれたと推測できる。鮮虞の出現は、晉による東陽進出を背景として、狄人たちの一部が新しい城邑を選択的に建設し、集住したことを意味していたのである。

鮮虞中山の建国という事象は、農耕・牧畜の境界地域に居住していた非定住民である狄人が、城邑に定住する「國」というシステムを採用し、南方の諸国からの侵攻に対抗した現象として、理解できる。それは、後進的な遊牧民族が先進的な農耕民族に一方的に同化・融合された過程としてよりも、むしろ複合的な文化を有する人々が、選択的に国家形成を行い、国際社会において次第に地位を上昇させていった経過であると考えるべきであろう。このような棲み分け的な動きによって、農牧境界を挟んだ二つの地域的枠組みが、次第に明確な形で形成されてゆくのである。

第三章　春秋時代の中華秩序とその特質

春秋戦国時代の中華（「中國」「華夏」「夏」「華」）は、これまで膨大な数の研究で言及されてきた概念であるにもかかわらず、その範囲や性格、そして時代的特質については、なお不明な点が多

く残されている。問題は、春秋時代を対象とした文献が叙述する「華夏」がいかなる構造を有していたのか、そしてその時代的な特質がいかなるものであったのか、という点である。

まず『左傳』に見える「華夏」に関する記述を検討すると、次のような特徴を看取することができる。「華夏」とは齊・晉などの主宰する国際会盟に参列した「諸侯」を指したものであった。さらにそれは「戎狄」などと対立する枠組みとされ、「蠻夷」諸国が「華夏」に擾乱を生起するような事態は、周王朝の諸侯にとっての災禍であると見なされていた。

また『左傳』では、周王や霸者、あるいはどこかの国が自国のみを「華夏」であると主張する事例は見られない。「華夏」とは、あくまでも会盟に参列した諸国（霸者から見れば自らに服属している諸国）や、自国と他国との関係性を言う場面で使用されているのである。このことは、『左傳』における「華夏」が、国際会盟などで形成された諸国間の関係を呼ぶ概念であったことを示唆する。つまり「華夏」を理解するためには、そこに共通する性質を論ずるよりも、むしろそこで共有されていた親密な関係性に着目しなければならないのである。

そこで春秋時代の諸国間に存在していた等差を確認すると、諸国間には、周王と特定の諸国との間に、血統的親近性を主張する「兄弟甥舅」なる意識が存在し、「蠻夷戎狄」に対する階層的優位が主張されていたことが判明する。「華夏」とは、諸侯の中でもとくに「兄弟甥舅」を中核とする諸国間で共有された、秩序ある関係を意味していたのであった。

しかし当時の国際会盟には、「兄弟甥舅」の諸国のみならず、「蠻夷」や「小國」として蔑視される、さまざまな出自をもつ諸侯も参列していた。また、「戎狄」と呼ばれる集団や「裔」「俘」などと呼ばれる人々の排除を主張する言説が、『左傳』に採録されている。このような事例は、当時の「華夏」が「兄弟甥舅」に限定されるものではなかった反面、「國」扱いされない集団が、そこから排除されていたことを示している。「華夏」とは、血縁や地域、あるいは何らか特定の文化を規準に成立した枠組みではなく、むしろ異質なる諸国を結びつけて構造化し、同時に参列すべからざる存在を排除するような、諸国間で共有された関係性の論理であったと考えられる。春秋時代の霸者である晉は、「夏盟を主（つかさど）」る存在であった。

春秋時代の中華が諸国間の関係を意味していたことは、「華夏」のみに限られる事象ではない。「中國」もまた、「四方」の中心である成周洛邑を指した西周期の意味から拡大し、複数の諸国を呼ぶ言葉になっていたと考えられる。それは「兄弟甥舅」を中核とする周王と「親暱」な関係にある国を意味していた。さらに「夷狄」との対立を主張する『公羊傳』や『穀梁傳』の「中國」もまた、『左傳』の「華夏」と同じく、同盟関係などを通じて諸国を包含する枠組みであった。

以上の理解を踏まえ、文献を残したと考えられる周系諸国人の視点に立った場合、春秋時代の華夷意識は、大きく三つの階層に分けるて捉えることが可能である。

第一にそれは、各地に封建された周系の諸侯から見た、「國」を構成する人々と、周辺の異質な

習俗や文化を持った戎狄蠻夷との間の差異意識である。とくに戎狄は、周系諸国の近隣に居住していたが、「國」とは見なされていなかった。

第二に、諸国間のレベルにおいて、やはり差異意識が存在していた。すなわち王朝による封建を受けた歴史的な由緒を持ち、互いの親近さを認め合う「兄弟甥舅」諸侯と、それ以外の雑多な出自を持つ諸国（「小國」「蠻夷」）や、姫姓でありながら封建諸侯と見なされない「胄裔」などとの間に、同じ「國」の中でも等差を設ける意識である。

第三に、「兄弟甥舅」を中核としつつ、「小國」や「蠻夷」諸国をも包含しうる、国際秩序としての華夏の論理である。これは霸者を中心に王室の権威を認め合う同盟関係に即して展開した。同盟関係に参列した中原地域の諸国と、それに与しない四方の諸国、あるいは参列を許されない「戎狄」「裔」「俘」などとの間には、内・外の境界が存在していた。

このように春秋時代を対象とした文献の中華とは、何らかの規準で構成される固定的な枠組みではなく、また後代に捏造された虚構の理念でもなく、春秋時代における周系諸国人の重層的な差異意識の上に構築された、諸国間で共有される親密な関係性を意味していたのである。

第四章　春秋時代の国際会盟と華夷秩序

前章でおもに観念の面から検討した春秋時代の中華の性格は、国際会盟という具体的な現象を検討することによって、実態面から検証する必要がある。そこで本章では、春秋時代の国際会盟の事例を網羅的に整理・分類し、人々が有していた同時代的な意識を帰納的に復元した。

406件に上る春秋時代の国際会盟を通覧すると、諸国が個別に蠻夷戎狄と会盟したり、あるいは楚や晉などの大国の君が、蠻夷戎狄の集団群との間で君臣的な関係を結ぶことは、春秋時代において明確に行われていたことが確認できる。しかし反面、複数の諸国が一同に会して共通の秩序を形成する多国間会盟では、蠻夷戎狄を排除する姿勢がほぼ一貫していたことが判明する。

また春秋時代の多国間会盟には、北方の齊・晉を中心に展開した周王を理念的頂点とする同盟と、南方の楚王を中心に周王の承認を得ないままで展開した同盟とが存在していた。『左傳』や『公羊傳』・『穀梁傳』において「華夏」や「中國」と呼ばれたのは、北方の同盟秩序に属した諸国であった。さらに「華夏」の同盟内部には、莒・邾・小邾・薛・杞など、周の「兄弟」諸国から見れば「小國」や「蠻夷」に当たる様々な出自をもつ諸国が、かなり頻繁に参列していた。

「夷は華を亂さず」という『左傳』の華夷観念は、春秋時代の実態から乖離した思想ではなく、霸者を中心とした諸国間の秩序ある交渉関係から、戎狄や俘虜が一貫して排除されていた現象を的確に伝える内容だったのである。また、中華という枠組みは、周王を頂点とする黄河流域と、楚王を頂点とする長江流域という、二つの地域的な枠組みを前提にした概念でもあった。

すなわち春秋時代には、複数の国の間で「周」や「国」という枠組みを越えた、相互間の広域的

な結びつきが進展していた。それは同盟内部において「兄弟甥舅」という資格を越えた一体性を形成する一方、同盟外に対しては、新たな境界を生み出す結果となったのである。

第五章　晉文公の諸国遍歴説話とその背景

春秋時代を通じて、中華の同盟を主宰した国は晉である。その晉国の定霸の君であり、中華の同盟の祖型を形成した文公には、戎狄との密接な関係や即位前の諸国遍歴を伝える特異な説話が残されている。それは次のような説話である。すなわち、晉獻公の末年、驪姫の乱により「狄」に亡命した公子重耳が、12年間の滞在の後に出発し、衞の五鹿という地において野人から土塊を受け、従者の狐偃が瑞祥として拝受させる。さらにその後、齊・曹・宋・鄭・楚の諸国を歴訪し、亡命から19年後に秦へと到着して、穆公の援助を得て帰国を果たした。こうして即位した文公が後に楚との戦いに勝利し、周襄王から「侯伯」として策命されるという内容である。

中華同盟の形成者であり、周王の策命を受けた文公の伝記に、「禽獸」のような戎狄との密接な関係や、齊・宋・楚・秦といった大国との関係が積極的に叙述された理由とは何であったのか。本章では、文公説話を分析することによって、その背景となった晉の霸者権力の性格と、それに対する史伝伝承者たちの認識とを復元する。

まず、周王と晉侯の間で結ばれた「策命」の内容を検討する。践土という地で楚の俘虜を献納した晉侯に対して、周襄王は車馬・醴酒・弓矢・近衛兵などを賜与して「侯伯」に任じ、「敬(つつし)みて王命に服し、以て四國を綏(やす)んじ、王の慝(にくむところ)を糾(ただ)し逖(とおざ)けよ」という「命」を賜っている。この事件が実在したことは、近年公表された青銅器「子犯和鐘」銘文からも確認できる。

このような献納と賜与は、西周時代以来の伝統的な構造を有していた。すなわち臣下が王命を奉じた戦役で獲得した俘虜を王に献納し、王がその見返りにさまざまな権限の象徴された器物を賜与するという行為は、西周時代にも行われていた儀礼であった。

しかし西周時代の「冊命」儀礼と比較すると、践土での「策命」には特異な点が存在している。それは、この儀礼が周王の命令による四夷の討伐、晉侯の復命、周王の冊命と賜与という順序で行われたものではなく、むしろ実力で諸侯を編成して楚を破った晉侯が周王を呼び寄せ、戦果と同盟編成権の事後承認を求めた行為であるという点である。践土の策命は、理念的に四方を支配すべき周王の権威と、現実的に四方を統率しうる晉侯の権力とが、相互の契約的な承認によって結びついた瞬間であったといわねばならない。

では、このような策命が持っていた積極的な意味とは何であったのか。春秋時代の晉・齊・宋・楚・秦は、いずれも東西南北それぞれ一方の戎狄蠻夷に君臨する国家であった。とくに晉は、霸者として策命される以前に、「兄弟」諸国を数多く滅ぼして縣邑化し、周辺の戎狄とは積極的に婚姻関係を結んでいる。策命以後の晉は、一転して王朝を頂点とする階層的な序列を維持し、諸国間の

紛争を鎮定する機能を果たした。しかし、その一方で晉は戎狄集団と君臣的な結合関係を構築し、ときには戎狄を指嗾して、周王室を圧迫する事件さえ起こしているのである。

このような四方の諸国が対峙する情況を念頭におくことによって、周王と晉侯との間で取り交わされた「侯伯」の地位承認の儀礼が持つ意味を知ることができる。晉は、いわば匹敵する大国の一つとして、中央の周や姫姓諸国を間に挟んで、齊・宋・楚・秦の諸国と向き合う国であった。

こうした情況下、周王による策命を受けて同盟を編成し、周王を一貫して推戴し続けることは、同盟内部では姫姓諸侯という同格者の支持を取り付ける正統性として機能し、また外部の対抗者に対しては盟主としての優先的な地位を主張する根拠となったと考えられるのである。

晉文公の諸国遍歴は、晉から「狄」へと亡命した公子重耳が、「兄弟」たる衞・曹・鄭からは疎外・冷遇される反面、東方の「東夷」、南方の「蠻夷」、西方の「西戎」に君臨した、四方の大国というべき齊・宋・楚・秦の援助を獲得して復国し、中央の諸国に対する覇権を確立するという構図になっている。晉の後継者としての地位を喪失し亡命した重耳が、周辺の協力を受けて帰国し、形骸化した周王に代わり中華の秩序を構築する。晉と戎狄、兄弟と蠻夷、そして周王朝と四方という重層的な差異の間を往復し、中心と周辺を結ぶ関係を規定した権力が、『左傳』の認識する覇者であったと考えられる。

第六章　『春秋公羊傳』の華夷観念とその構造

『公羊傳』は『春秋』の傳（解説書）である。それは『穀梁傳』とともに、『春秋』の義理を論ずる傳といわれ、『春秋』の筆削者が片言半句の經文に込めたとされる毀誉褒貶の評価や意図を、主に問答体の形態で逐一解釈する内容となっている。この『公羊傳』は、「中國」と「夷狄」との対立を主張する、きわめて特徴的な華夷思想を有する書物である。本章は『公羊傳』の華夷思想の構造を分析し、その歴史的立場を解明することを目的とする。

まず『春秋』の記述傾向を分析すると、そこは公侯伯子男の「爵」以外にも、序列の上位国と下位国、諸国と戎狄蠻夷の間で、それぞれ差異が存在している。それは魯と周に関する記事が最も詳細であり、宋・齊・晉・衞・陳・蔡・鄭・楚などの上位の諸国に関する記事がこれに次ぎ、関係の薄い諸国や序列が下の諸国に対しては粗略であり、戎狄や呉越に関する記事が最も冷淡である。魯を中心とする視点に基づき、戎狄や呉越を周縁とする、多様な書き分けが存在していた。

この『春秋』經文に対して『公羊傳』は、魯中心の『春秋』の視点に基づきながらも、様々な差異を「夷狄」という統一的な呼称で括り、「中國」との対立を強く主張するという、二元論的な色彩が強い観念を有していたと考えられる。また同時に『公羊傳』は、現実に存在したと考えられる多様な差異を捨象して、むしろ楚や呉などに対する『春秋』筆削者の否定的な評価の方を優先するという、強い「攘夷」的な傾向を示している。『公羊傳』がとくに楚・呉に対する排斥意識を有し

ていたのは、両国が現実には「王」号を称し、他国を従属させていた事実を反映していると考えられる。すなわち黄河流域と長江流域との対立が、『公羊傳』の認識の前提になっていた可能性が高い。

さらに『公羊傳』における「中國」とは、魯を中心とする視点から、周王朝の理念的な秩序に属する諸国や地域を呼ぶ概念であった。とくに霸者を中心とする現実の同盟関係に参列した諸侯を呼ぶ点では、『左傳』の「華夏」と一致している。しかし『左傳』が春秋時代の中華を多様な差異の上に構築された秩序ある関係として認識していたのに対し、『公羊傳』はあくまでも周や魯を中心とする、理念的な枠組みの方を強調する傾向がある。

このように『公羊傳』の華夷観念は、歴史的な現実を拒否して懐古的な理念を強く主張する、すぐれて原理主義的な色彩を有していた。かかる思想は、春秋時代の魯人の意識を継承しつつも、戦国時代以降にその継承者たちが自分たちのあるべき地位を外に表現できない情況下で、現実を拒否する方向へと、次第に鬱積していった思念であったと考えられる。

結　論

以上、本論の考察結果により、まず春秋時代の周系諸国人の重層的な差異意識は、次のように立体的に復元できる。

①「国」と周辺の戎狄蠻夷の集団とを区別する意識。春秋時代の「戎」「狄」は、邑居せずに山林藪沢地において生活する、言語・習俗など様々な点で周人とは異質な人々であった。

②諸国間における等差を設ける意識。周王朝によって封建された由緒ある「兄弟甥舅」諸国が、そのほかの雑多な諸小国や、文化的に異質な「蠻夷」諸国に対する階層的優位を主張していた。

③霸者主催の国際会盟に参列する諸国と、それに参加しない国や集団との間の階層的・地域的な区別。霸者が主宰し王朝を推戴する諸侯が「華夏」や「中国」と呼ばれ、それに与しない国や、隔離された集団（「夷」「裔」「俘」）との間に境界が生まれる。

春秋時代の華北には、城邑によって構成される諸国の周囲で「戎」や「狄」と呼ばれる非定住民の集団が広範囲に活動していた。また諸国の中にも、周王から封建された歴史的資格を有する「兄弟甥舅」という諸国の他に、「蠻夷」や「小國」という雑多な出自をもつ諸国が存在した。中華とは、このような差異の上に構築された、諸国間の交流の枠組みを意味していたのである。

次に、中華の枠組みが形成された経過を、春秋時代の諸国間において結ばれた国際会盟の展開に即して、具体的に解明した。

『左傳』の「華夏」とは、「兄弟甥舅」を中核とする複数の諸侯が、相互を「親暱」な関係にある国と認め合い、霸者を中心に構築していた多国間会盟の枠組みであった。その中には、周の封建秩序から見れば「蠻夷」に出自を持つ諸国や、序列上は「小國」にあたる諸国など、異質な存在も

含まれていた。

「華夏」の盟主である晉が、ときに「蠻夷の訴えを信じて以て兄弟の國を絶つ」ような機能を果たしていた事実は、春秋時代の中華秩序が「兄弟甥舅」という、周王朝の歴史的な資格に限定される集団ではなく、むしろ多様な「小國」や「蠻夷」を取り込み序列化してゆく、相互の間で結ばれた関係性によって成立していたことを伝えている。

中華の形成はまた同時に、そこに参列しない他者との間に新たな境界を生み出す結果となった。霸者を中心とする同盟を形成した諸国と、そこに参列しない四方の国との間には境界が生まれ、また戎狄や俘虜など「國」と認められない集団は、同盟から一貫して排除されていた。春秋時代の華夷秩序は、差異を越える関係の広がりと、新たな境界の形成によって展開したのである。

最後に、春秋時代の華夷秩序に対する文献史料の認識と評価の位相を、『左傳』と『公羊傳』という二つの文献を通じて考察した。

『左傳』の文公説話は、晉国と戎狄、兄弟と蠻夷、そして周王朝と四方という、重層的な差異の間を往復し、中心と周辺を結ぶ関係を規定した権力として、春秋時代の晉の霸者権力を描き出している。これは春秋時代の華夷秩序と、それを規定した霸者権力の実態に対する、史伝伝承者たちの現実的な認識と評価を伝える説話であった。一方、これに対し『公羊傳』の華夷思想は、むしろ歴史的な現実を否定して、周王や魯を中心とした往古の秩序に回帰しようとする、二元論的な特徴を有していたのである。

華夷秩序の形成と展開という問題に立ち戻るならば、本論の考察は次のように位置づけられる。すなわち中華理念の展開過程を、春秋時代の歴史的展開の中で、いくつかの具体的な事象に即して考察し、華夷秩序の展開過程を現象面から跡付けた考察であった。〈中華〉と〈夷狄〉という実体の存在を与件として、両者の区切りを論ずるのではなく、また華夷観念の虚構性のみを論ずるのでもない。本論では、形成過程の華夷観念を春秋時代の現象面から分析することによって、春秋時代の社会の重層性と多様な関係性に着目した、新しい形成論を提示したのである。

以上の考察によって、西周時代の周王を中心とする封建秩序から、複数の諸国の間で関係性を基軸とする共同意識として形成された中華秩序、そして夷狄との関係を含めた華夷秩序への展開過程が、解明されたと考える。

論文審査結果の要旨

中国を中心とする東アジアにおいては、「華夷関係」と「中国」「中華」等は国際関係や中国・日本などの意識を読み解くためのキータームである。この「華」「夷」の区分と関係、及びそれと密

接に関わる「中国」概念等の形成過程で最も重要な時代は、それらが始原的に現れた春秋時代である。本論文はこの時代の「華夷」問題について、丹念な資料の読解と中国・日本の膨大な先行研究に対する批判的検討により、「華」と「夷」の重層した「関係性」に着目して学会を裨益する新見解に満ちた優れた研究成果をあげたものである。

序論では、中・日の膨大な先行研究の批判的整理・検討によって、「華」と「夷」の二項対立的理解ではなく、諸「関係」性から春秋時代の「華夷秩序」を解明すべきことを浮かび上がらせた。第1章・第2章では、基本文献『春秋左氏伝』等と膨大な考古学的成果に基づき「戎」「狄」集団のあり方を究明し、主として「山林藪沢」に居住していた非定住の集団であったこと、覇者晋はそれらを支配に組み込む形で領域を拡大したが、一方、鮮虞中山のように「狄」集団が独自の国を形成した場合もあったことを明らかにした。

第3章では、「中国」「華夏」「華」「夏」という言葉で表現される「中華」の文献使用例を分析し、当時の「華夷意識」は、各国と周辺の「戎」「狄」との差異意識、「兄弟甥舅」と意識された諸国と他の諸国との等差意識、及び「蛮夷」をも含む国際会盟による国際秩序という3層をなしていたことを明らかにし、第4章で春秋時代の会盟の全般的整理検討を行って実態的にそれを裏付けた。

第5章では、国際会盟を主催する晋の覇者権力を形作った晋・文公の諸国遍歴説話について、晋と戎狄、「兄弟」と「蛮夷」、王と四方等の関係性を取り結んだ権力としての認識が示された説話であったことを解明した。第6章では、『春秋左氏伝』と異なる観念をもった『公羊伝』は、魯を中心とする「中国」観念をもつことと呉・楚を排撃する攘夷的色彩が濃いことを明らかにした。結論では、春秋時代の重層的な差異意識に基づく「華夷秩序」をまとめた上で、戦国時代以降、「夷」を外的存在と観念していく史的展開についての見通しを示した。

本論文の対象とする分野は分厚い研究蓄積があり、関連研究・史料及び究明すべき事柄も多い。それだけに今後さらに深化・展開すべき問題点も見られる。しかし、「華夷関係」研究において研究史に残ると考えられる成果をあげたことは、特筆されてよい。これらにより、論文提出者は自立的研究者として高度な研究能力と学力・学識を有しているものと判断される。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。